
魔王 or 勇者

泉 飛白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王 or 勇者

【Nコード】

N8831X

【作者名】

泉 飛白

【あらすじ】

突然知らない場所にいると思ったら、魔王にされて、奇襲掛けられたり、告白されたり、追いかけて回されるってどういうことなわけ！？

平々凡々に生きたい女の子の波乱万丈な人生？

※ あらすじは悩みますから適当です。中身が違う場合がありますのでご注意ください。

1話 魔王になる？

それは余りにも突然だった。私は学園祭で劇の途中だったのだけど、一度瞬きをした瞬間に辺りが様変わりしていた。

私を見て顔を真っ青にして口々に魔王だ殺されるやらと好き勝手に言葉を浴びせてバタバタと出て行く人、腰を抜かしたり気を失うなど実に様々。そして私一人でポツンとこの広い部屋というかホールに残され仕舞いには生贄らしい女性達がこの世の終わりという顔をしていた。

髪、瞳は黒だ。日本人らしい色だったが先程は妙にカラフルで黒は誰一人いなかった。格好は劇の為に男子から学ランを借りて長い髪を深紅の紐で結び男装している。胸はサラシを巻いているし間違えられても文句は言わない。

これに関してだけは言わないが“魔王”という所だけは文句言うかな！

「ひっ」

知らない内に眉間に皺が寄り険しい表情をしていたようで怯えさせたのかペタンと冷たそうな床に座り込んでいた。

これはいけないと自分の眉間を指で押さえゆっくり目を閉じて息を吐いた。冷静になろうと落ち着けと思っても出来ない。

「魔王。貴方、わたくし達に害を与えるために来たのですか？」
「…違う」

私の馬鹿と心の中で多いに罵りながらも果敢にも話しかけてきた女性を見た。滅茶苦茶美人じゃないか。なんていうか、高嶺の花みたいな人だ。

同性からみてもお近づきにくいオーラというか美しさ。

あまりの美しさに言葉が出なくなった。もっと好印象与える言葉があったらとかいう考えはなくなっていた。

多分、私は男だったらこの女性に惚れていたなと思う。残念だから私は女なので見とれた程度だ。

「わたくしはエリ…」

名乗ってくれようとしたその女性の言葉を遮るように硝子が割れる音が背後から聞こえ、一人の女性以外の顔がまるで救いが来たといい顔付きになり身の危険を考え振り向いた。

その先にはキラキラと輝く綺麗な金髪、透けそうなほど澄んだ蒼色の瞳、凜とした顔立ち。まるでおとぎ話の中から出て来たような王子様が単身で乗り込んできた。

もしかしたら本当にどこかの王子様で私の後ろに見初めた人がいるのかもしれない。

出来過ぎたシチュエーションのようなそれにクラツと倒れそうだ。これで私でなければ問題ないのに。

“魔王”を退治にきた“勇者”なんだろうな彼女達から見たら、きつと。

「貴様か。余の名を名乗る不屈き者というのはっ！」

その言葉に頭がフリーズする。

というか、理解できずにその言葉が頭の中に何度も繰り返される。

「えっ？」

それが私の口から漏れたものなのか、違うのかはわからない。

この見た目が王子様のような男はただ真っ直ぐと私を見つめ、
もとい睨んでいるのだけど何か納得いかない。

とてつもなく後ろの反応を確認したい衝動に駆られるが、何されるかわからないこの男にだけは背中を向けられない。油断して斬られて死んだらどうなるか。

そして目の前の男が冗談を言っている風にも見られない。

ただとりあえず、目の前の男こそがこの世界でいう“魔王”らしいということだ。

私の中にあつた魔王というイメージが音を立てて崩れたと同時に、
もしかしたらこの世界の“勇者”が魔王のような容姿なのではない
だろうかと最悪な考えが浮かんだ。

とりあえずその“勇者”が私でなければいいと思うと同時に、
初っ端からラスボスとかどんだけだ。

どうやら、レベル1のような状況でレベルがマックス近いラスボ
ス、または隠しボスに出会った気分です。

一つだけ言うなら“魔王”と名乗った覚えは生まれてこの方一度

もない。

2話 告白をされる

とりあえず、私は目の前の魔王に適当な謝罪と争う気はないという旨を名乗りと共に伝え、比較的に穏やかにになった空気の中で急に後ろから名乗られたが振り返れずいた。

だって魔王の方が大事じゃんか。

「ユーリ様が好きなのです！」

自分の名前を呼ばれうっかり振り向いた私にあの高嶺の花もといエリザベスというあの女はとても厄介なことをしてくれたようだ。

告白前に何か呪文を呟いたそれは“男性限定の魅了呪文”だったらしく、それは最初に見た女性に惚れるというモノだった。ペラペラと話して何故かからないと言ったその女に怒りを覚えると同時に寒気が走った。

このホールには男は1人しかいない。ギギツと鈍い音になるような動き振り向くとそこにはとろけるような甘い表情をした“王子様”。

「余の花嫁になってくれ」

一人称が余なのかと一瞬思ったがすぐに扉目掛けて走り蹴飛ばす。

アレが“魔王”！？

あんなんじゃない“王子様”みたいじゃないかとかあんなに簡単に魔王様が呪文とか聞くのかよ、と悪態をつきながら全力疾走をするがついて来る。

周りがあればどの王子だとか魔王を倒しにきた勇者だとか喜ぶ声が聞こえる。端から見たら逃げる魔王と追う勇者の図なのだ。

外に出ても追ってくるというか徐々に距離が近づいてきている。

「余はユーリを愛している！」

ゾワツと鳥肌が立ち、身震いをする。正面から言われたら口から砂糖を吐きそうだと口を押さえた。

たいぶ離れてしまったと思いながら何故か開いた門を潜ると何故門を開いたのかが後になってわかった。

「ひいっ！」

思わず止まった。

そして振り向いた。

「余の名はルシフェルト」

「名乗るな」

聞いたら流されそうで怖い。王子様スマイルで微笑む魔王に顔がひきつりそうだ。

「魔王陛下！」

後ろから声がする。魔將軍じゃないか、と勝手に思い込むと背中に汗がびっしょりだ。

「余の妻になってほしい」

ツカツカと歩いて来ると跪きそう懇願した魔王。もはや、身体が動かずなすがままに手を取られ、手の甲にソツと唇を落とした。

その瞬間にどつと当たりが沸き上がったような悲鳴という雄叫びが上がった。

上目遣いでこちらを見つめたままのルシフェルトと名乗った魔王は辺りを気にしていないが私にはハッキリと聞こえていた。

陛下が男に、目出度いのか目出度くないのかわからない、気が触れたなど不名誉ばかり囁かれているのに動じない。ただ私は後ろよりも前にいる魔王はやばいと感じ慌てて手を引き抜いた。

一息付いてから後ろを振り向くと見目麗しいと言いたいが角やら牙やら人間とはちょっと違った人達が緊張したように空気が張りつめていく。

さっきの馬鹿騒ぎは何処にいったんだと怒鳴りたいがまずは対処しないと、一つずつ確実に解決したい。

「話がある」

一通り話している間も魔王は私を熱く見つめていた。そして、宰相のヴィンセントさんに話しているときは激しく嫉妬しているようで視線が鋭い。

「：通りで。こちらとしたら魔王陛下には早く身を固めて貰いたいので構いませんが」

「何か言ったか？」

「いえ。こちらとしてもゆゆしき事態です。術者を殺すか、元に戻

させるしかありませんがその方はあちら側ですからね」

そう言って遠い目をした。確かに明らかに敵同士ですよ。つか、何でこんな近くに陣取って攻め込んでないんだ？

夢なら覚めないかな？

「何を憂いているのだ」

悪寒と吐き気が収まらない。

この見た目“王子様”の魔王を元に、早く元に戻してくれ！

「余は魔王。そんな術など効くはずない。この心に偽りなど有りはせぬ」

いやいや、あの剣幕には嘘偽りなかったから、一目惚れなんて1ミクロもないからね。

「后になってほしい、ユーリ」

ゾワツと寒気が走る。

本当に生きてはいるけど、生きていることが苦痛です。ひと思いに死なせてください。

3話 標的にされる

「ユーリ殿は女性だったんですね。てっきり男性だと思っていたんですが、実は両せ、ぐはっ！」

私は暴力は嫌いだ。

嘘ではない。

華麗に吹っ飛ばされたヴィンセントさんを眺めながら清々しい微笑みを浮かべた王子様もとい魔王は私に話しかける。

「アレが失礼を言ったな」

「気にしてない」

魔法で派手に吹っ飛ばされた姿を目の前で見た私には恐怖しかない。

ルシフェルトだっけ。ルシフェルでいいじゃんか。魔王ルシファールとかでいいんじゃない？

こっそり心の中でルシファールと呼ぼう。見た目王子だけどやっぱり魔王だ。

「そなたは本当に美しいな。それに加え余は」

不意に顔を暗くさせたルシファールは目を伏せ俯いた。長いまつげが影を落とし何とも言えないな。

いやいや、卑下する顔じゃないだろ。相当美しい造形だからね！

「魔王としては威厳のない姿だ。人間は余を見ても恐怖すら感じないのだ」

まあ、魔王軍の中に貴方がいたら勇者だと勘違いして歓喜に湧くでしょうね。一筋の光でしょうね。

「余は魔王としては」

なんだこのヘタレ。

とりあえずこの魔王は素なんだろう。きっとこれは本音だ。

そんな見た目じゃ魔王として自信が持てなくなったんだろう。確かに魔王勢の中に勇敢な勇者が1人に見える程度だ。

本当に王子様みたいな顔だとマジマジ見ても思う。爽やかそうな好青年って感じだもんね。

「お前の部下はそれでも付いてきているということはただの同情かなのか？」

「違うっ！」

弱い者に従うはずはないんだよ。さっきの魔法なんか凄かったじゃないか。

それに悪役なんかが同情でも従うはずないしね、絶対っ！

「ならお前は…ルシフェルトは立派な魔王だということだ」

名前が後少しでルシファーになるとこだった。良かったセーフだ。

「見た目が本題じゃない。要は中身だ。弱音を吐いていると中身まで墮落するぞ」

やっべ、私ちょっと良いこと言っちゃってるかな。

「胸を張って魔王であることを誇れ、ルシフェルト」

でも、生意気言い過ぎたかな、土下座の準備したほうが良いかな、などと思っていたら、ルシファーはいつの間にかパツと顔を上げていた。

その顔には迷いはない。

「ユーリ、余はもう外見は気にすることを止める。どんな姿でも余は魔王ルシフェルトだ」

「ああ」

怒ってはなさそうだ。相変わらず王子様のように爽やかな顔で笑っていた。これで魔王なんだから世の中は不思議ばかり。

「今まで余が儘を言い皆に迷惑を掛けて済まなかった」

その言葉に魔王軍の皆さんが恐れ多い、皆好きでやっているやらあの魔王陛下がなどと男泣きしている。あ、あの人は女性だな。

どうでもいいことを思いつながらルシファーの目が向いていない今が逃げ時だとそろそろと静かに背を向ける。

「ユーリ殿」

ビクッと身体がふるえそうになった。ソツと話しかけてきたのは先程吹っ飛ばされたヴィンセントさんが何食わぬ顔で立っていた。

いつの間にいたんですか。

「魔王陛下を変えて下さってありがとうございます」

「別に何もしてない」

だから見逃して、そんな絶対に逃がさないと云った目で見ないでください。ごめんなさい。

「余所者がいたら邪魔だろう」

見逃してください。家族団欒しててくださいよ、ヴィンセントさん。

私は魔王とは一切関わりありませんからね。最初なんかルシファ―に睨みつけられたんだし。

「いえいえ、魔王陛下の伴侶になられる方です。というより、伴侶になって陛下を支えてもらいたい」

いや、何故そうなるの。

そんな風に見ないでくれ。私は平々凡々な人と結婚して仲睦まじく幸せな家庭を築きたい。

押してける気満々な目だ。標的にされてない？

こんな美形で魔王なルシファ―と結婚なんかすれば波乱万丈に決まってる。王子様や金持ちじゃなくてもいい。

私は人並みの幸せでいい。

人の気持ちも知らずにヴィンセントさんはルシファ―のことを語っているが、私は騙されないからな。

「ヴィンセント、そこで余のユーリに何をしている？」

「魔王陛下を少しでも知ってもらい好きになっていただこうと」

そう言ったヴィンセントさんを労っているルシファーを見て私は思う。

問題の魔法はどうなった。

呪文で私に惚れたこと忘れてないか？

4話 余所でも話は進む

ユーリの知らぬ所で事態は進んでいた。

「そんなユーリ様が、ユーリ様…」

へなへなと座り込んでしまったエリザベスを慰めようとする女達が囲んでいる所に兵士達が入ってきた。

「王女様ご無事ですか!？」

「ユーリ様が…そんな…」

兵士達の間を縫いながら歩いてきたどこにでもいそうな顔をした男に気づいた兵士達は道を開け、エリザベスを囲んでいた女達も避けた。

「リズ、僕の声、聞こえてるかな？」

「…リック兄様？」

やっと顔を上げたエリザベスに優しく微笑んだ男は第2王子リチャード。

のほほんとした雰囲気をしたリチャードを見た瞬間にポロポロと涙を流した。

「ミシエルも心配していたよ。流石にこっちは来れなかったけど」

「…ふう、ユーリ様が女性でしたわ」

「え?」

流石にその言葉にリチャードは咄然とし困り顔になった。突然言

われても困るだけの言葉に先程までエリザベスの近くにいた女を見つめた。

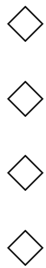
「あ、あの、突然現れた黒衣の人です」

おずおずと言ったように話す女の話にリチャードは呆れるばかりだった。それ以前にどちらが本物の魔王だとしても簡単にここに入ってこられたことに危険を感じた。

「リズはそのユーリという人を好きになったのかい？」

「ユーリ様、素敵でしたの。ミシエル兄様みたいで理想でしたのに」「いつまでもここにいても仕方がない。リズ、一度城に帰ろう」

その言葉にコクンと頷きエリザベスとリチャードは城に行き、父親であるエドワード王と第1王子ミシエルにこの出来事を話どうするか聞かなければならない。



城に戻り出来事をエドワード王に説明しているが、そこにはミシエルの姿はない。

「ふむ。ミシエルは今日も自室で引きこもっているというのに魔王軍がついに動いてしまったか」

頭を抱えたエドワード王は茶色の髪をガシガシと掻き乱す。リチャードは父親譲りの髪を指先でクルクルと弄んでいる。

エリザベスはミシエルの自室へと行き話をしている頃だろう。

「ミシエル兄上はあまり人とお話にならないからね。僕は兄上がそのうち言葉が話せなくなるんじゃないかと心配です」

「いや、それもそうだが。今は魔王軍が我が国に攻め込んで来ないかと」

「そんな心配を5年したけどそんな様子はなかったじゃない父上。今はリズの初恋の問題だよ」

なるべく応援してあげたいなどとのほほんと言う息子を見て、エドワード王はこれから我が国の行く末を心配した。

第1王子ミシエルは引きこもり。

第2王子リチャードはこの調子。

第1王女エリザベスは気が強く嫁の貰い手がない。

第2王女ユリアナは内気で臆病なために人見知りでミシエルのように引きこもりになるのではと心配。

第3王子アルヴィンは乙女チックで悩みの種。

エドワード王は自分の兄のように突然、農業をするという王座を引き渡し隠居したウィリアムを思い出していた。

そしてよくこの国は潰れなかったものだとしみじみと思う。

「：エリザベスは魔王に掛けた呪文解除をしなければユーリという者は魔王の後になるのではないか？」

そこから始まる愛があるのでは、と小さく呟いたエドワード王の言葉に目を見開いたりリチャードの行動は目にも止まらぬ早さだった。

「魔王軍もなんとかしてくれと有り難いな」

壊滅させてこいと言わないがよき知らせがくれば、1つ肩の荷が降りれば愛しい妻と過ごす時間も増え、安心していちやつけるだろうとエドワード王は思い笑みを浮かべた。

5話 引きこもり王子

綺麗な赤髪を緑の髪飾りで飾る美しいエリザベスは父親譲りのエメラルド色の瞳で目の前の人物の前に立っていた。

「まあ、無事で良かった。リス」

「はい」

引きこもり王子ことミシエルは端正に整った美貌に笑みも浮かべず、アイスブルーの瞳が目の前にいるエリザベスを見ていた。

「ミシエルお兄様」

微動だしない能面に戸惑うことなくエリザベスは嬉しげに微笑んだ。

「ユーリがミシエルお兄様と結婚すれば家族ですわよね。結婚してください、ユーリ様と」

「……何を言っている？」

ぶっとんだ話を脈絡ないまま言い放ったエリザベスにミシエルの眉間に深くシワが寄り目に力が入った。

「ですからユーリ様とご結婚を」

「何故、俺が」

「リック兄様は平凡顔だもの。アルヴィンは綺麗だけど若すぎってどうか乙女。あり得ませんわ」

吐き捨てるように言い放つとエリザベスは婚約者や恋人も出来た

ことのないミシエルにユーリと結婚するようにお願いし続ける。
眉を顰めて絶句したミシエルに強請るが言葉を発することはなかった。

「ユーリ様がミシエルお兄様とご結婚すればわたくしの家族、お義姉様になるんですわ!」

期待に満ちた物言い、胸を張ったエリザベスは満面の笑みでミシエルを真っ直ぐ見つめた。

そこに扉を壊す勢いで、というかブチ壊して入ってきたリチャードにエリザベスは驚き、ミシエルはハッと我に返った。

「リズ、魔王に掛かった魔法を解かないとユーリが無理矢理花嫁にされてしまう!」

「…いやああっ!!」

絶叫したエリザベスがブチ壊された扉に向かおうとしたがリチャードに優しく制された。

「とりあえず、ミシエル兄上について来てもらおうよ。一番魔力もあるし剣の腕も引きこもりなのに一番って世の中間違ってるよね」

「リックは魔術に長けているだろう。使えない魔法はないと言われるほどだ、俺はいらないだろう」

「兄上がいるなら心強いし、外に出す良い機会じゃないですか」

にこやかに笑うリチャードに思わず凄むような顔をしてしまったミシエル。だが、言い出せばしつこく付きまとうと知っているミシエルは渋々立ち上がり外套を着た。

「…行きたくない」

「未来の花嫁を助けに行きますわよ、ミシエルお兄様」

「あれ、そんな話になったの？」

目を丸くしたりチャードはエリザベスを見て首を傾げた。ミシエルは苦々しく口元を歪めた。

本人の意志などそっちのけで話は進むのを何ともいえない表情で見ながら、魔王の花嫁にでも后にでもなってしまうなどと心の中でミシエルは思った。

「よし、さあ行こうか」

いつの間にかミシエルは椅子に座り、一人で黙々と一国の王子が刺繍をしている。それにリチャードは笑顔をひきつらせ、エリザベスは苛々していた。

いくらしつこいからと言ってやはり出たくないミシエル。

「兄上、嫌がらせしますよ」

人と会いたくないミシエルは大抵のことは事実で出来るようになっていく。ちょっと目をずらせば広がる菜園、キッチンといった物が本格的にある。

服も布があるなら作れるからといって寸法なども人にさせない。

「…何故、俺が行かなければならない」

「未来の王妃のためにですわ！」

「会ったこともないのか」

無表情で針を刺していくミシエルは2人を見ない。

「なら、来てくれたらこれからは無理矢理外には連れだそうとはしないって言うのはどう？」

「…本当か？」

「うん。リズがここまで言うんだ、一度は絶対会ってもらう」

真剣にそう言ったリチャードを見てミシエルは片付けてから重い腰を上げた。

「行くだけだぞ」

「うん。じゃ、とつと行っちゃおうか」

にこやかに笑いながらも先頭をきるリチャードに早く駆け出したと言った顔で続くエリザベス。そして、のんびりと優雅に足を進めるミシエルはこれから起こる事を思いもしなかった。

6話 魔王様と王子様

なんなんだろう、このカオス。

向こうからあのエリザベスが見知らぬ男性2人が歩いてきて、魔法を解いてくれるのかと思ったら変な雰囲気になってしまった。

1人だけ向こうに魔王っていうか冷徹そうな雰囲気した人がいる。もう1人はのほほんとした平凡だけど癒される雰囲気をしているけど台無しだよ？

「リズが掛けた魔法解かせてもらいたい。ああ、僕はここの第2王子リチャード。リズ、いや妹のエリザベスがご迷惑を掛けたいですまないね」

え、って事はエリザベスは王女様？

そんな人を人質みたいに、いや待てよ。なんか魔法使ってきたってことは、人質に成りすましてちよつと殺っちまおう的な？

「何をしに来た人間が」

いや、私ちよつとわかんないんだけど。ルシファーも人間とさして変わんなくない？

人に限りなく近いのだった一部が角やら牙、翼があったり、肌が鱗だったりしてるけど、ルシファー見た目が人間みたい。

だから、威厳がないんだ。

「で、こっちが兄上のミシェル」

「……」

「ユーリ様はわたくしがお救いいたしますわ!」

なんだろ、めっちゃくちゃあのミシェルっていう私より魔王って言葉が似合いそうな王子が見てる。

長い銀髪がサラサラと靡き輝く様が綺麗だと思いながらもアイスブルーの瞳に睨まれる。

「余のユーリを見るな」

低くうなるような声で言い放ち私の前に立つ。とりあえず、あのリチャードって王子がずっとのはほんと和むような微笑みを浮かべてたけど魔王軍のみんなは殺気立っていた。

それと私はルシファアのじゃないから。とりあえず、魔法解いてもらえ、早く!

「ルシフェルトに掛けた呪いを解いてほしい」

「ユーリ、余は魔王だ。低俗なモノなど効きはしない」

じゃ、不意を突かれたんじゃない?

だってあんな状況で恋とか愛とか目覚めないから、殺意なら芽生えるけど、殺気なら湧くけどね。

ルシファアにも男に間違われてただろうし、どうせ。

「頼めるだろうか、エリザベス?」

むしろ解け。というか君達は敵同士じゃないのかな、こんなところに王子とか王女とか来ていいのか?

「そんな、わたくしのことはリズとお呼びくださいユーリ様。わたくしが魔王から解放してさしあげますわ!」

「訳の分からないことを言うな、小娘!」

魔族っていうのかなルシファー達って、もしかなくて長生き? 言い争いを聞き流しながら2人を見てみるけど、歳はそう離れてなさそう。一緒くらいに見えるのはあのミシェルっていう冷徹そうな王子。

精神的にはあのエリザベスと同じくらいかもしれない。

「…ユーリ、と言ったか?」

居心地悪くて離れて傍観していたんだけどいつの間にかそばに近寄って来た向こうのミシェルとかいう王子がいた。

「ああ、私は優里 松浦だ」

「ユーリ…マトウラー」

正しい発音をしていただきたいです。というか、その低い声がちよつとアレだよ。

怖いな、ちよつと誰か助けてくれないとか思いながら逃げ腰になつてしまう。後退りしたい。

「俺は、君に一目惚れしたようだ」

真摯な眼差しでそう言ったミシェルの顔はほんのり朱に染まっ
いて、なんて言うか萌えだ。ギャップ萌えだ!

私、今間抜け面してないだろうか、口馬鹿みたいに開いてないだ

ろうか。というか1日で2回も告発…じゃない告白されたよ、人生初だ。

でも私は幸せな人生を送りたいから、身分高いのは受け付けないから。私、この世界の人間じゃないから、他当たってくんないかな？

あ、誰かまた掛けたんじゃない？

「貴様、余のユーリに戯けたことを！」

「ふん。お前は所詮まやかしの感情だろう。俺は違う」

いや、どっちも選ばないから。

「余はそんなこと…」

チラッとエリザベスが私の視界に入った瞬間に近づいてきたルシフェルトは頭を抑えて苦い表情を浮かべた。

7話 解けた想いと芽生えた想い

わなわなと震えだしたルシファアは顔を真っ赤にして私を指差した。どうやら、解けて正気に戻ったみたい。

「よ、よよ余はちょっと油断したからあんな事態になったのだ!」

言い訳を始めました。どうやら魔王ルシファアは頭が弱い人みたいです。まるっきり子供のようでした。

うーん、魔王ってこう落ち着いて威厳たっぷりなイメージだったんだけど。

「貴様みたいな男女な威厳たっぷりでいかにも魔王みたいな女なんて余が、余が好きになるはずない!」

おお、私も非凡な人は恋愛対象じゃないから良かったよ。
つか本当にガキみたい。

「魔王陛下!」

「余は悪くないぞ!」

ルシファアはそう言いながらどこかに走り去ってしまった。ヴィンセントさんは私に頭を下げて謝ると追いかけていった。のだが、すぐに戻って来てここにいるようにと言われてしまった。

ぶっちゃけ、逃げたい。

ふと隣にいるミシエルとエリザベスの2人を見る。似てるような

気がする。チラッとあのリチャードを見てみる。

腹違いってわけでもないのかな、とか思いながら観察しているとどことなくちょっと似てることに気づく。

「ユーリ様、ミシェルお兄様と婚姻なされてはいかがですか？」

ぶっ飛びすぎな会話についていけない。お口があんぐりだよ。怖いよ、この王子王女達。

もっとオブラートに、遠回しに話してくださいよ。そしたら華麗にスルーするからさ、お願い。

「ユーリ様がわたくしの」

あ、自分の世界に突入したな。とかさっきからミ歇尔さんが睨んできます。いや、もしかしたら熱い視線なのかも知れないけど、睨まれてます。

魔王軍も静寂こそ貫いてるけどピリピリしてる。殺気ムンムンだよ。

「ユーリ、貴女は料理は好きか？」

「ああ、食べるのは好きだ」

むしろ、食べる専門です。

料理できないからお嫁さんを貰いたいくらいですよ、はは。

嫁の貰い手はつかないんじゃないかと親が言っていたよ。いっそ婿に出すかって言ってさ。私は女だったの。

「俺は作る方が好きなんだ」

「そうか」

ん？

いや、貴方って王子様じゃなかったっけか。料理とかしないんじゃない、メイドとか召し抱えてる人が作るんじゃない。

何、貴方は自活でもしてるのか？

実は妾の子で良い待遇されてないから辛い生活をしてるとかいう感じとか、なわけないよね。

「裁縫も得意なんだ」

ポツリポツリと話すミシェルという王子は随分と庶民的なんだな。野菜の皮も葉も余さず料理ってどんだけエコなんだ。

いや、ニコニコ笑いながら私達を見ないでくれ。そこのリチャードめ。

にしてもまじまじと洋服を見るが、どれだけ凝ってるんだよ。もう職人として食っていきけるよ、一国の王子なのに。

「ミシェル兄上がこんなに喋るのは珍しいんだよ」

いや、そりゃ話す内容がこんな庶民的なら話の合わない。それ以前に家庭菜園もしてるみたいだし時間も問題？

つかどれだけ育ててるんだよ、何目指したいんだ。

魔王軍もそんな話になんか微妙な空気流れてるよ。

「兄上は一途だよ。絶対に浮気しないし、見た目も性格も家柄も文句なしの一流物件だよ。家事も出来るしね」

売り込みなの？

なに、王族ってこんな感じなの。良識人はいないのか。私なんて身元不明のとても怪しい人間なんだけど。

つかさ、リチャードって言うのが第2王子ってことは兄上と呼んだミシエルは第1王子だよ。王位のお話ってどうなってんだよ。

「…俺はユーリさえ良ければ婚約を」

「駄目ですわ。生温いですわ！」

逃げたい。そう思ってふと目線をずらしたら走ってくるルシファ―を見つけてしまった。

「余は、余はあんなモノに掛かってユーリに惚れたわけではないのだ！」

いきなり何？

思わず目を見開いてルシファ―を凝視する。頭が可笑しくなったんじゃない？

「ユーリを、ユーリが、愛しい！」

…帰りたい。

8話 泣きたくなりました

開いた口がふさがらない。いや、口は開かなかったが、もう棒立ちでルシファーを見ました。

「余をあんなに想ってくれるのはユーリだけだ」

すいません。話が見えない。もしかしてルシファーの近くに控えてるヴィンセントさんが何か言いました？

吹き込んでくれちゃいましたか？

「べ、別に余は」

「待て。散々先程あんなに暴言を吐いたお前が勝手なことを言うな」

しゃしゃり出てきた。ミシエルに加勢とばかりにリチャードとエリザベスが加わると、魔王軍の方も騒ぎ始めた。

なに、そんなに私の平凡な夢を壊したいのか。沸々と怒りがわき上がるが、ルシファーは怖いし、ミシエルも怖い。

魔法やら変な技が使えない私ではきつと手も足も出ないに決まってる。

だから、本人そっちのけで争い始めて私に注意が来ない好きに逃げ道を確保して逃げると思った矢先に一気に私に視線が集まることになった。

「「どっちが好きだっ!？」」

鬼気迫るような顔は酷く恐ろしい。美形なら尚更だし、なんか周

りも凄い顔をしてる。

答えないといけない雰囲気醸し出されてる。

でも、私の出す答えは一つしかあり得なかった。

バツと後ろを振り向き走る。後ろを振り返ったら殺されると思え、死ぬ気で走らないと一生後悔すると暗示をかけながら、騒がしい声を無視した。

私は、私は平凡な人と結婚して平和な家庭を作るんだ！

きつとあの2人がいる限り平凡なんて夢のまた夢に感じるけど、きつと帰れる！

元の世界に戻れば平凡な夢を見られるはずだと信じて、厄介なことに巻き込まれず帰る方法探そう。

相手は魔王に王子だ。

どれくらい逃げれば逃げきれんだろうかと思い、とにかく今はここから離れたいと思った瞬間に視界に端に移る地面が一瞬だけ光った気がしたからつい立ち止まる。

「え？」

その瞬間に眩い光に包まれてやっと治まったと思ったら見知らぬ地でした。一瞬でも元の世界に戻れると思った自分を殴ってしまいたい。

「どこだ」

異世界で迷子になりました。いや、異世界に来てからずっと迷子

なんだけど、だって全然わかんないし。

とりあえず逃げなかった方がまだ良かったのかな。知らない鬱蒼とした大自然な森の中にいるなんて、しかも目の前にいるやたら大きい犬科みたいな変な生き物は何？

私は死ぬのかかと思っていたら、犬科が逃げました。それも物凄く派手に怯えながら恥も外聞もないみたいになさ。

「まさか」

ガサガサとちょうど真後ろから物音が聞こえた。大した大きな生き物ではないみたいなのが、あのやたら大きな奴が逃げるくらいだから凄く奴に違いない。

逃走は失敗に終われば良かった。ていうか、いつの間に私はここに？

まさか、瞬間移動ってやつかな。それともアレかな、加速装置！ないな。ないない。歩いて走ってもなかったんだから。

「貴様っ、魔王だな！」

デジャヴ。

そんなに私は魔王なのか。とりあえず、人間か魔族とかそんな感じかな。きつと話せばわかるはず。

ドキドキしながらゆっくりと振り向くとそこには茶髪に藍色の目をしたいかにも冒険者みたいな青年がいた。もう、いやな予感しかない。

「お前、勇者だな」

つか、絶対に勇者だろ！

もう雰囲気と成り行きが勇者だと私に告げている。間違いない。

さっきのが逃げたのもきつとコイツのせいだったに違いない。恐
っ！

「そうだ。貴様を退治してくれる！」

「私は魔王ではない」

魔王はルシファー。ルシフェルトだからね。アレが魔王に見えな
いから私に厄介が来るんだ。どうせならミシエルと容姿変えてもら
えばいい。

「どこからどう見ても魔王だろ？」

私の下から上をじっくりと見た勇者は真顔でそういった。

「貴様がオレの想い人の心をかっさらった男っ！」

「……」

え、かっさらってないし、男出もないんだけど。

それ以前に否定しないと声を出す。だが思ってる以上に声が出
ていないみたいで何度か聞き返された。

存外、律儀な勇者で良かったが私の救いにはならなかった。
泣くんじゃないかと思うくらいに私は惨めだ。

「私は女だ」

「え？」

なんだろう、心が折れそうだ。

9話 文句はいえないけど

男装しているのだから文句はいわない。だけどさ、こう女じゃね、みたいな感じに気づいてくれても。

ミシエルは一目惚れらしかった。特に変なモノに掛かったわけでもなく自主的に。

ふっ、どうせ男っぽいさ。だけど、全身くまなく見られても男か。雰囲気からも男だと滲み出てるのかも。そんなことを考えていたら私はいつの間にか木に片手をついていた。

「私はもうこの森から出る」

お前からも全力で逃げる。魔王や王子の他に勇者が1人増えたくらいだ。

なんでこんなこと宣言したんだろうと思うけどしたものは仕方ないし、訂正しようない。

「出れるのか!？」

凄い勢いで勇者食いついてきた。え、なになに迷いの森的な場所? さっきから気になってたけど、剣何で突きつけないと思ったらなかったからでしたよ。

落としたの?

「魔物を追い掛けて入った森がうっかり《禁断の迷える深海》だったなんて!」

森なのに深海？

なにその某ゲームのエリ…いや止めよう考えるだけ無駄だ。

「ここはあるアイテム持っていないと出れない森なんだぞ！」

冷静に考えればこの勇者も迷子じゃないかと思ひ当たる。同類だ。

「…出れるなら、オレも一緒にいきたい。貴様は魔王じゃないらしいし、女だっていうし、手ぶらだからオレが守ってやる」

「剣を持ってないようだが？」

「っ、それは魔物と戦ってたら使いもんにならなくなったからだ！」

顔が真っ赤になった。よく顔を見れば普通に整った顔だ。美形とまでいかない。

「そうか」

「そうだ！」

ずいぶん声が大きいな。どれだけ張り上げてるんだ。しかしこの森からでれる気がしない。でも、来れたなら出れるはずだと木から手を離して決めた方角にまっすぐ向かう。

道ずれがいるから大丈夫だ。

そういえば、名前聞いてない。

「私はユーリだ。お前は？」

「オレはアーサーだ」

もうユーリと定着した名前を良いながら背後から追いかけてくる勇者に問えばアーサーだと返ってくる。

そのうち勇者王とかになるのかな？

「き、ユーリは魔王じゃないといったが。間違われても仕方ない髪と目だな」

ぶっきらぼうにそう言った言葉に思わず足を止めて振り返った。
後、絶対に今貴様って言いかけたろ。

「珍しいのか？」

「おう。人間は暖色系、魔族は寒色系が多い。金や銀、白や黒とかはまず珍しいんだよ。確かうちの国の王子様が銀らしい。見たことないけどな」

ああ、ミシエルか。となるとルシファーも例外なんだ。

「金や白は人間が多いとか、銀と黒は魔族が多いとかいわれてるから。ま、偏見だけどな」

「そうか」

「魔力の質や量で色が違うとか言われてるけど、当てになんねえよ。もう古い人間しか信じてない」

そっか。私の髪は珍しいのか。魔族に多い色だから魔王扱いされたのかと納得しながら、きつとあのミシエルも苦労したんだろうなと勝手に同情する。

「街に行っても兵士に取り押さえられるかもな」

同情してたら同情された。明らかに可哀想になって顔されてる。私が魔王じゃないって素直に信じちゃってる。いや魔王じゃないけど。

って不吉なことサラツと言ったよ。

「ま、助けてもらう恩義は返すからな」

「大丈夫だ」

誰がお前なんかに助けてもらうかと思いつながら、長く垂らした横髪を片方だけ手に取った。まさかここで唯一自慢の黒く艶やかな髪が原因になっていたなんて、ショックだ。

この黒髪である限り私はあの2人から逃げられないということだ。てつきり珍しくないだろうとか思っていたから楽勝だと。しかも、この勇者ことアーサーはルシファーを倒そうとしているから鉢合わせはしたくない。

下手に街で見られたらすぐに来そうな勢いを持っていそう。

「どんな髪色が目立たないだろうか」

「そりゃ、茶色とかオレンジだろ」

「そうか」

なら茶色にならないかなと思ったら瞬きの間にあら不思議、茶髪になってました。

：もしかして、あそこからここに来たのも私のせいじゃね？

チラツとアーサーを見るとさっきまで軽口を叩いていた仏頂面がアホ面になっている。どうやら本当に髪の色が変わっているみたいだな感じた。

私は手に未だ自慢だった黒髪だった髪を乗せたまま、呆然とアーサーを見つめ返しました。

どうやら、特殊能力があるみたいです。

10話 馬子にも衣装とはよく言う

ま、いいや。とりあえず、この深海とか言う森を出ないとなんかまた出てきそうだしね。

「行こうか」

「はっ、や、そ、髪の色！」

「…この服ならバレルか」

学ランなんてないだろうし、と思ってチラッとアーサーを見る。体格に問題はないな、足は私の方が短いかも。身長差もあるし、まさか座高が高いとかあったりする？

「貴様、追われてるのか!？」

「一方的に追いかけてるだけだ」

好きだとか結婚だとか勝手すぎるし、なにしろ一方的過ぎる。私の意志無視し過ぎなんだとふつつ怒りがわいてくる。いけない、眉間にシワが。

「魔王と間違われて苦勞してんだな。服、貸してやるよ」

「ありがとう、アーサー」

荷物をガサゴソと漁っているのだが、何かおかしい。何がおかしいって入ってる量がありえないくない？

四次元なのか。それって四次元なんじゃないか！

さすが異世界。私もそんな手に入れられるかな、欲しい。でも、その分重いのかな？

「ほら、これ前にサイズ間違った奴。だからやるよ」

「ああ、ありがとう」

サイズ間違えたら返品しろよ、とか思いながらありがたく貰えるものは貰う。

アーサーには少し離れた場所に行ってもらって学ランを脱ぐ。はたしてこれ返せるかな？

「ん、ぴったりじゃん」

これで私はとけ込めるはずだ。脱いだ借り物達を一応畳んむ。
またしても男装なのが泣ける気がする。街に行ったら女物がほしいけどお金がないな。

集るか？

「アーサー、着替え済んだぞ」

「そうか。なら、早く出るぞ！」

周りを警戒してるみたいだけど、やっぱり何か危険があるんだな。
でも頼もしい勇者がいるから安心だね。

アーサーに会えて良かった。ようやくまともな人に会えた気がするんだよね。

しばらく歩いたら森を出れた。アイテムなくても出れんじやんかと拍子抜けした私を尻目にアーサーはあっちが街だと先頭を嬉々として歩いた。

やっぱり勇者は先頭が好きらしい。

森を出るとアレが美味いとかあの店はああだこうだと色々な話を聞いてこの世界を知った。

「お礼に服買ってやるよ。それともその格好って訳ありか？」

「いや、訳ありではない。すまないな、何から何まで」

本当に申し訳ないな。訳ありかなんて心配してくれてるけどこれは劇のために全然訳ありじゃない。

もう苦笑いだよ。

アーサーは宿と服、そして当面の食事を保証してくれるそうマジで様々だ。仕事も一緒に探してくれるみたいでギルドとかも進めてくれた。

勇者は親切みたいだ。

最初からアーサーに会いたかった。

「ほら、ここが街だ。大分、首都と離れてるけど此処はギルド本部があるからなかなかかいんだ」

「ギルド本部」

「ユーリは魔力が強みたいだな。オレは欠片もないんだぜ」

打ち解けたのか表情も柔らかく人懐っこさがある笑みを浮かべた。アーサーって良い人だ。

私って魔力あるのか。魔力って何って聞きたいけど魔力ないアーサーに聞いてもしょうがないよね。

とりあえず、瞬間移動とか髪の色変えられたり、攻撃や惚れ葉みたいなのが魔力があると出来るってことだね多分。

「お、あのおっきい建物がギルド本部。でもまずは服買うか」

あそこだあそこだと言うアーサー。でも他人から見たらきつと男2人が女物の服を選んでるようにしか見えないんだろうな。ああ、そうだ。私の借りてた学ランはアーサーの四次元に入ってる。本当に色々と気遣ってくれる。

うっかり惚れたらどうするんだ。万が一にないだろうけど。

そして服をちょっと定員の目が気になったけど無事に買い、宿を取って着替えたんだけど、ちょっと酷くね？

「…本当に女だ」

ポカーンとアホ面を晒してドアを開けたままのアーサーをぶん殴ってやろうかと思った。

まあ、髪をほどいてスカートを着てサラシを取った姿は別物なんだろう。

胸の締め付けがなくなっただけ嫌の良私はその言葉を取りあえずスルーすることにした。

「私は女だからな。当たり前だろう」

茶色に染まった髪がやっぱり不思議で触りながら確かめる。染めたことがなかったからちょっと変な感じがする。

あ、目の色とか変えなくても大丈夫なんだろうか？
街で見掛けた目の色に黒は会っただろうかと考えていた私はアー

サーの顔が赤みがかっていたことに気づかなかった。

11話 行動は計画的にしましょう

結局、瞳の色も変えた。色は赤茶。そしてまたアーサーと街に繰り出す。

化粧品とか必需品をアーサーに買って貰って本当に申し訳ないなと思うが、集るしかないし。

「武器は杖でいいか！」

「ああ、任せるよ」

口調変えなきゃ駄目かな。声も高めにしないと、知り合いはいないからそこまで警戒しなくていいのかな。

いや、ここは魔法とかあっちゃう摩訶不思議な世界なんだから万が一があるかも。

「本当に何から何までありがとうございます、アーサー」

声を高く、言葉は丁寧に柔らかく。後、笑わなきゃ。ずっと劇の悪役風紀委員長みたいになってたかも知れない。友人から軽く脅されてて失敗出来ないと意気込んだからな。

あ、ちょっと帰りたくない。もし、私がいなくて失敗でもしたら殺される。なんだろ、やるせない。

帰っても切なくなるだけだ。

「：いや、気にすんなよ。知り合ったのもなんかの縁だしな」

「そう言っていたけると気が楽になります」

まともな人だ。ミシエルとかなら運命の糸がなんとかかんとかと

話し出しそうだなと考えてふと思った。

あの場所から私が消えた後、あの2人はどうしたんだろうと、一応敵同士だったんだよね。

気にしないでおこう。忘れよう。憂鬱な気分になる。

アーサーと武器と防具を買って貰ったんだけど、なんか異常に高そうな物。金額はだいたい今までの買い物でわかったんだけど、此処での金額は教えてもらってない。

甘えておこう。後で払えって言われたら大変だろうな…逃げようかな。

もう、逃走中の身だし。

「ギルドに入るのか？」

「ええ、そうしようと思ってます」

「ならオレが紹介してやるよ」

あ、名前。流石に本名だとバレるよな。名前どうしようか。

「名前は偽名でもいいんだ。魔力でこれまで犯罪者かわかるし。引つかからなきゃ偽名でも本名でもってな」

「そうですか」

ずいぶん大雑把なギルドだな。でも、偽名はちょっと、親にもらった名前だし、もう改名しちゃったしね。

ああ、もうひとつ問題があったんだ。私こっちの文字読めないみたい。

何この難解な文字列。話だけ通じて良かった。話通じなかったら私はココにいなかったよ。

「署名するんですか？」

「ああ、する」

どうしたとこちらを見るアーサーは何か閃いたのか笑顔を浮かべた。やっぱりコイツはイケメンだ。

ミシエルとルシファアが別格だったんだな。あのとことん平凡なリチャードだって美形に入っていたのかも一瞬考えたが、ないな。

「代筆してくれるぜ。大抵、字が書けないってのが多い。オレもど田舎出身で書けなかった」

そっか、珍しくないんだね。この調子で私のユーリって名前も珍しくないって言われると非常に助かるんだけどね！

そんな都合の良いことないよね。

ギルドってやっぱり討伐とかそんなイメージだけど子守、家事、薬草摘み取りとかもあった。

そして何より驚いたのは、アーサーって有名人だったんだね。

あんな森で武器まで無くして迷ってたからそんな雰囲気ないのに。いや、最初の登場にはビビった。それにあんな大きい獣が逃げるのだから当たり前か。

「Sランクなんだ、アーサー」

「おう。凄いんだろ、オレ」

ランクは5つ。

上からS、A、B、C、E。

Eは戦闘ではなく主に家事や子守といった安全なものをする人用。
B、Cは簡単な討伐や薬草摘み取りなどの外仕事で、Aは危険な討伐が主。

Sはアレだ。天災レベルの討伐らしくこれはSランクの数名じゃないと許可が降りないみたい。

なんか、RPGみたいとか思いながら、手続きをしてる。ちなみに私の名前は珍しくはないらしいようで、まあ、普通にいるのと、男で。

なんだ、このやるせなさは。

「よっし、かけた」

代筆はアーサーがしてくれた。なんだろ汚さそうな字だなと勘が私に告げた。

これなら、私の名前でも男だと思ってくれるはずだとニヤリと笑う。

私は平穏な人生を送るんだ！

「…その実力計るために一応」

「ああ、わかってる」

一刻も早く私は平穏な生活を送るんだ！

自分の世界に戻っても時間が進んでたらどうしようか、酷く恐ろ

しい。

まあ、帰れるかも怪しいか。

「手っ取り早く終わらせる」

まさか口に出していたとは思わずに馳せる私を見て青ざめて見る
アーサーと受付をしていた職員がいたことに気づかなかった。

とりあえず私は帰る方法を探すんだ。

12話 使用用途が違います

杖を大きく振りかぶった。まさに、バットを振るごとく力いっぱいにやった。

言い訳が許されるなら突然、出てきた奴らが悪いんです。私は悪くない！

実力計るためについて実践なんだね。流石にいきなり連れて行かれいきなり始まるのはなしじゃない？

「ギャウツ」

そう言っで丸まるというか大きな体を縮めようとするかのようにする姿になんか悪いことしたなといった気分になる。情けない鳴き声をあげるからさらにいたたまれない。

え、動物虐待しちゃった？

どうすることも出来ないのだから後ろにいるだろうアーサーとギルド職員を見る。なんか、アホ面がいます。

「すみません」

お高そうな杖で思いつき殴ったのがいけなかったのか、虐待しちゃったのがいけなかったのか、どっちなんだ！

もう正直に言ってくれ、早く私を楽にしてくる、覚悟は出来てる！

いや、出来てないかも。

「あの寧猛な、怯え…何者なんだ!？」

「…いや、オレに聞かれても」

アーサーの肩を掴み激しく体を揺するギルド職員の青年の掛けている眼鏡がずれている。

もしかして、私は非常識？

後ろにいる大きな体をしたのは何だったんだと気になり振り返ればこちらをうかがっていた。

猫科だな。マジマジと見れば尻尾は2本あって、顔はちょっと嚴ついが愛嬌があるように見えてきた。

「……っ」

駄目だ。撫でくり回したい。

ソツと近づくとびくりと体を震わせたけど警戒はされていない気がしたので、手を伸ばし撫でた。

最高の手触りではなかった。ザラザラしているな、ちょっと残念だけど。後ろの言い合いをBGMに戯れ続けた。

「…何をやっているんですか、貴女」

「撫でています」

ゴロゴロと喉を慣らしながら腹も撫でてくれと催促する姿はなかなか可愛らしい。でも、飼うには大きすぎるな。

ちょっと後ろを見ながら言う。眼鏡を人差し指でクイツと上げるその人は生真面目そうな優等生って印象だ。

「文句なしのSランクですよ。杖で殴るとは思いもしませんでした。魔法を使うとばかり思っていたんですがね」

「いや、オレ見るな。知らなかったんだよ、オレだって!」

なんでも実力が計れなかったようだ、すでに相手を懐柔してしまったし、結果は見えているような気がして馬鹿馬鹿しいとのことだ。

いや、結果なんて見えないよ。なんか勘違いしてるんじゃないか言いたいけど、雰囲気には吞まれて何もいえなかった。

「申し遅れました。ボクはリユー・ヒーラギといいます」

「…りゅう、ひいらぎ?」

思わずリユーと名乗ったその人を見つめた。瞳は黒い、髪は茶色で肌は見慣れた色というか、特有の色だ。こっちに来てからは色白と日焼けした肌の色くらいだ。まれに褐色の人もいた。

「君は日本人?」

「っ、貴女もしかして」

驚愕に目を見開いたリユーはズカズカと私に近づき手を取るとまたズカズカと歩き出す。アーサーが何か言おうとしたけど吹き飛ばされた。

デジャヴ?

多分、やったのはこのリユーに違いないと思う。何か呟いていたし、間違いない!

私以外にも日本人いたんだ。何かわかるかも知れない。

「ガウウッ！」

「：どうかしててください、貴女のペットでしょう？」

目の前を遮る大きな巨体はリユーに威嚇している。私としてもリユーとは話し合いたいし、時間を無駄にしたくない。

「アッチでアーサーと遊んでなさい。迎えに行くから」

指をさした方には頭を抱え立ち上がっているアーサーがいる。親切にしてくれたけどきつと聞かれたくないから吹き飛ばしたんだろうと思う。

間違っていたらごめんなさい、アーサー。

伏せられた頭を撫でつけるとゴロゴロと喉を鳴らした。

「アーサー、殺さないようにね」

「ガウ！」

なら、行け！

ドサドサと音を立てながらアーサーに向かって歩いていく。

うん、後で名前をつけてあげよう。

「本来は討伐される魔物の一種なんですがね」

なら、動物虐待ではなかったのか。

思いきり愛玩動物かと思ってしまったんだけど、なんか妙に懐いて来るものだから。

番犬がわりにできるな。

頼もしい仲間が出来たよ。

13話 突然の告白でした

上等そうな絨毯に紅茶のカップに残っていた中身が染み込んで、カシャンと音を立てて割れた無残なカップ。

いけないと思っていても体はついてこない。ただ呆然とその様を見つめた。

とりあえず、片付かないと思いつけていた椅子から立ち上がりしゃがんだ。手を伸ばしカップの欠片を拾おうとして指を切ってしまった。

「ユーリさん」

「ごめん、私、カップ」

「申し訳ありません。いきなりこんなことを言ってしまった」

いつの間にか私のそばに来てしゃがみ傷ついた方の手を優しくリユーは両手で包んだ。その瞬間にフワッと暖かいモノを感じた。

「破片はボクが片付けますから」

ゆっくりとした動作で離れていくリユーの手を見て思わず掴んだ。切ってしまった指は何事もないように白かった。

「申し訳ありません」

「謝るな、何も、言わないで」

リユーは悪くないじゃないか。何も悪くなんかない。謝る必要なんかない。

眼鏡の奥の瞳が申し訳なさそうに伏せられて、長いまつげが影を落としている。

リユーは真面目なんだ。生真面目すぎて駄目だ。

「もっと、悲しくなる」

嗚呼、泣いてしまう。

リユーを困らせたいわけじゃない。きっと私が泣いたら困る。

「泣きたいときに泣くべきです。そうじゃないと泣けなくなってしまいますよ」

「…困るんじゃないか」

「ボクは困りませんよ。溜められる方が迷惑です。胸なら貸します、無償で」

なんだろう、さっきの治療は有料なんだろうかと思いつきりしゃがみこちらを見ているリユーにタツクルした。

呻く声が聞こえたけど聞こえないふりをした。

やっていけるんだろうか。

「このギルドは異世界人によって創られたんですと話しましたよね」「聞きましたよ」

「ボクの先祖は方々旅をしたそうですが、見つけれませんでした」

聞けば最初は何でも屋から始まったそうだ。その当時では画期的なアイディアで財をなし1代でギルドにしたそうだ。

最初からこの場所を拠点にしていたみたいだ。あの森が何かあるのかも死ぬまで探したそうだ。

「あの森には異世界からの物を持っていないと出れません」

「だから私はあの森を抜けられた」

「…入ったんですか」

呆れたような声が聞こえたけど顔を上げられず頷いた。

リュウの服に涙と鼻水を染み込ませているから本当に申し訳ないな。後で怒られるだろうか。

「馬鹿だ馬鹿だと思っていましたが」

抑揚のない声を聞きながら未だに止まらない涙を流す。こんなに早く挫折するなんて思わなかった。

さらっとアーサーとの出会いを話したのだけど、ルシファーとミシェルのは話すべき何だろう。

頼り切るのは心苦しい。

「リュウ、ありがとう」

「別段と感謝されるようなことはしていませんよ」

その声と共に背中をぎこちなく撫でられた。この体勢ちよつと駄目だな。涙も引っ込みそうだし、ゆっくりと離れて服の袖で涙その他諸々を拭き取る。

「帰れないなら帰れないでそれでもまあ、いいけど」

そりゃ、家族や友達は恋しい。でも、いつまでもズルズルと引きずるわけには行かない。

薄情かも知れないけど仕方ない。

「コッチで問題が」

「…何をやらかしたんですか？」

「この国の王子のミシエルと魔王のルシファア。間違ったルシフェルトに求婚されました」

鼻を軽く啜りながらリユーを窺えば、片手で頭を抑えた。

「それでアレですか。なんの冗談だと思っていましたが、いや、喜ばしいことだったのですが…貴女が関わっていたんですか」

「どうかした？」

「実質の被害はなく悪化させない目的であの件は放置していました」

あの件って言うのは目と鼻の先で冷戦状態だったあの件ですか？
思いつきり私かき回しちゃった気がします。

私のせいで戦争？

いや、喜ばしいって言うんだから違うよね。戦争は喜ばしくない。

「同盟したんです」

「はい？」

ギルドで登録に来た私は何故か異世界での先達に帰れないという
事実を告げられた挙げ句、あの2人が何をしたか知った。

その行動力の異常さに私は間拔けな声を上げた。

13話 突然の告白でした（後書き）

書き直すべきだろうか。

だけど、せっかく書いたのに。

酒のおいによられながら書いたから変な話だ。

確かめようにも確かめられるような友人もいないので投稿いたします。

お気に入り登録が100と僅か。

なにか、こんな文章で申し訳ない気がします。

読んでくださってありがとうございます。

14話 生け贄に差し出されました

説明が遅れたがリユー・ヒーラギはギルド長。まだ若いけど実力はあるそうだ。

「とりあえず、ミシエル王子と魔王ルシフェルト様には連絡をいれました。明日の夜にはこちらに来るでしょう」

「……」

「ボクとしても心が痛みますが、お国には逆らえませんよ」

清々しい笑みを浮かべたリユー。さっさと着替えを済ませて私を手早く生け贄にしましたよ。

「異世界人の保護は我がギルドに伝わる絶対の掟。ですがミシエル王子とルシフェルト様が間違っても多分、ユーリさんに危害は加えないでしょう」

悲観した気持ちは吹っ飛ぶ。コイツ、悪魔だ。絶対に怒ってる。

「婚姻の件についてはボクから無理強いしないように一応伝えました」

「そうか」

ホッとした。

凄い形相で詰め寄られたらまた逃げるしね。私としては問題ないけど。

「逃げたらギルドから指名手配しますから、その覚悟があるなら逃走でもなんでもしてくださいね」

「悪魔だ」

「なんとでも言ってください」

そう言う私の顔をマジマジと見つめてきた。なんだろうか、なんか付いてる？

思わず自分の顔をペタペタと触るけど自分ではよくわからない。鏡、鏡と目線をさまよわせるとリユーは一言謝ってから理由を言った。

「黒髪に黒目と聞いたのですが。何をしたんですか、ユーリさん」
「髪と目は目立たないようにならないかなと思ったら色が変わりました」

「無意識に魔力を使っただけですね」

やっぱりそんなことだったのか。使い方もわからずよく使えたなと呑気に思っていたら、リユーが考え込むような仕草をしていた。

嫌な予感しかない。

でも、逃げたら指名手配される。特に悪いことをしたって言う訳じゃないのに、横暴だ。

とりあえず権力者がこんな職権乱用していいと思ってるのか。

「ユーリさんには明日、魔力の使い方を教えますね。今日はもう遅いですし、1冊本をお貸ししますから明日まで呼んでおいってください」

「…悪魔」

ポツリとそういえば、眼鏡を人差し指で上げながら素晴らしい笑

みを浮かべたりユーが淡々と話し始めた。

「今日は色々遭ったでしょうから1冊だけと思いましたが、悪態をつける元気があるようですから」

「1冊だけお願いします。もう色々ありすぎて頭がパンクしそうです、ごめんなさい」

土下座する勢いで頭を下げた。

もう、いい加減夜だし、ゆっくりと休みたいけど読んで寝ます。

悪魔だ、本当。

「使い方を覚えた方が色々と便利でしょう。間違った使用で変な目には遭いたくはないでしょう？」

「ないです」

ちょっと考えたくらいでまた変な場所にいたとかあったらもう目も当てられませんから。絶対に迷子の勇者に会えませんかね。

勇者で思い出したけど、リユーはルシファーが何処にいるか知っていたみたいだから、アーサーも知ってた？

知らなさそうだな。

「明日の夜までに覚えたいですね」

どうして明日の夜とか思ったけどわかった。確かに私は明日の夜までに覚えた方が良くかもしれない。

「覚えたいです」

「よろしい。なら、アーサーの所へ戻ってください。ユーリさんの

ペットに押しつぶされているかもしれませんから」

その声に頷き、名前つけてあげるんだっと思い出した。

分厚い本を手渡されたときは一瞬だけ意識が飛びかけた。やっぱり、リユーは悪魔だ。その時の笑みと言ったら憎たらしいものがあった。

親切なのか親切じゃないのかイマイチわからない。

とりあえず、早く迎えに行つて早く名前つけて早く読んで寝よう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8831x/>

魔王 or 勇者

2011年11月4日14時06分発行